

緑区の前身 都筑 郡のころ

今回は緑区の調査にちなんで、都筑郡の歴史的な歩みをふりかえってみよう。都筑郡の領域は緑区の全部と旭区、港北区の一部を占めるが、近世以前については断片的にしか知る手がかりがない。ただ、港北区と緑区に現存する杉山社と熊野神社の分布から、次のように考えられる。

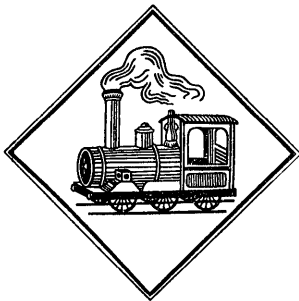
杉山社は「新編武蔵風土記稿」によれば70数社を数えるが、大半は都筑・橋樹郡に集中し、少数が久良岐・南多摩郡に分布している。式内社は茅ヶ崎・大圃その他諸説あって不明であるが（註1）、「金沢文庫古文書」（7）所務文書篇の5198号文書〈郷々五升米徴納政所下文〉に、茅ヶ崎に接した勝田の名がみえており（承元3年—西暦1209年）、早瀬川の丘陵に位する茅ヶ崎杉山社の存在から、この地帯の開発の古さを知ることができよう。

杉山社信仰は横浜・川崎地方の土俗信仰に由来するが、一方、熊野神社は地形的にみて、水害をうけず、もっとも早期の開発に適していた港北区の師岡から鶴見にかけての台地に分布しており、この頃有力な開発者集団が師岡を中心に団結していたらしい。師岡集団とさきの杉山社信仰の集団との関係はよくは分らないが、師岡神社の分布をみると、荏田・谷本までひろがり、師岡集団が発展の過程で次第に杉山社集団を吸収していたと解釈できよう。

つぎに、江戸時代初期の検地帳

と人別帳によって、当時の農村のすがたをみよう。長津田村を例にとれば、文禄4年(1595)の耕地面積は65町5反だが、1世紀後の享保期は159町8反（外に宿分32町5反）にふえており、人数も文禄4年の土地登録者26人に対し、寛文6年の人別帳では197人と増大している。同村はいくつかの狭い谷間にささやかな耕地が開発された所だが、その谷々の出口付近に開発者の子孫が住んでいた。26人のうちには、6町台所有が1人、8町台が2人という大百姓がいる。これらの大百姓は初期木百姓といわれるが、1反以上のまとまった耕地を何筆か所有して、自己の家族と譜代下人、さらに名子、被官的な従属百姓の両者を駆使して、農業の直接経営をいとなんだものと思われる（註2）。

また、青砥町には延宝元年（1673）と安政5年（1858）の人別帳がのこされているが（註3）、この村は江戸時代になって小山村から恩田川の水を引き入れる用水路の完成以後に成立した村で、天水田の村とちがって比較的新しい村だが、そのためか延宝期27人の村民中5石以上の高持者が25人を占め、最高の次右衛門でさえ16石余しか所持しておらず、大高持がみられないが、青砥の名でもわかるように、恩田川と鶴見川の落ち合う、水害を受けやすい村であったためか、農民の土地所有の移動がはげしく、延宝期12石以上所持の5人の家は安政期にはすべて10石



以下に減じている。

江戸時代も後期になると、幕府など公の機関が、政策立案のための基本史料として、さまざまな調査を行なっている。文政期には、関東農村一帯にわたって農間余業の調査がなされており、商品生産の滲透によって変りつつある関東農村のすがたを統計的に把握できる。天保期になると、これは神奈川県内の史料だが、二宮尊徳が小田原藩下農村の立て直しを行なう際、政策立案のために現状分析がまず第一に必要であるとして、足柄郡西大寺・栢山・曾比・鬼柳村などの実態調査を実施している(註4)。この調査によって、個々の家々の田畑所有面積、農業経営史料、小作関係、農産物の生産額奉公人の数、投入肥料金額、日雇人夫など余業収入の明細、1年間の総収入、借金の内訳などが明らかになる。尊徳の出身村である栢山村を例にとれば、弘化元年(1844)の農家数は47戸で、地主6、自作7、自小作34にわかれ、地主は2町7反から4町1反に及ぶ手作経営を行なっているが、水田単作地帯であるためか、収入の大部分は米穀の販売によるものである。

都筑郡では、郡内に川和・元石川・玉禪寺村などの増上寺御霊屋料が散在しているが、天保8年以後同支配25カ村に対し、農民の手作・小作面積調査を行なっており(註5)、区域では川和村の嘉永3年(1850)の史料がある。川和

村は田29町、畑77町の畑勝ちの村で、戸数は101戸だが、鶴見川自然堤防の上のできた村にもかかわらず、用水は鶴見川からとらず、天水田の村だった。農民の内訳は、地主9、自作21、自小作15、自小作55となるが、地主層のほとんどが2町歩以上の手作をしていて、地主制の成立以前であることがわかる。自作層は労働力過少のため小作していない層で、農業経営の典型は自小作層にみられる。すなわち、15人のうち9反歩以上耕作者14人が9割を占めている。川和村の余業農家は長津田村とともに近隣ではいちじるしく多い方で、明治5年(1872)には97戸のうち26戸が余業をもっている(木挽5、杣4、屋根屋5、炭焼3、桶屋2、その他)。しかし専業農家にくらべ少ないとはいえ、それぞれ手作を行なっているのが、関東農村のおくれた姿を示している。

明治期になると、統計資料はより整備され、一郡、一県にわたる数量的な把握が可能になる。『神奈川県統計書』の刊行は明治16年をまたねばならないが、それ以前にも、壬申戸籍、農産表、物産表などが統計史料として利用できる。

明治5年における都筑郡北部の村別農産表によれば(註6)、米・麦・大豆のほか、粟・稗・そばなどの雑穀生産がみられるが、穀物以外ではまゆ・炭・桑・甘柿などが記載されている。この地方の

特産物としては柿・木炭などが知られているが、開港以後には原町田・八王子との関係から鶴見川の上流地域に養蚕がはじまっている。禪寺丸と名づけられた柿や炭は中原街道を通過して江戸へ売出されたものであろう。また明治5年の壬申戸籍にみられる余業農家は木工・木挽・屋根屋などにすぎずわずかに川和のとなりの下谷本・市ヶ尾村に物品販売業の各2戸があるにとどまる。

このように江戸の近くにありながら山村のなたたずまいを濃厚に残在した都筑郡の北部の村々の姿は、佐藤春夫の『田園の憂鬱』によってもその牧歌的な風景がしのばれるが(鉄が舞台)、昭和になっても戦前には軍の施設がおかれた関係で、横浜線の沿線にくらべれば都市化しないままに戦後を迎えたのであった。

(註)

- 1 戸倉英太郎「杉山神社考」。
- 2 『横浜市史』第1巻。
- 3 飯田正行氏所蔵文書。
- 4 『二宮尊徳全集』。
- 5 『郷土よこはま』9号。
- 6 吉浜俊彦氏所蔵文書。

なお、郷土史料として、戸倉英太郎『都筑の丘に拾う』(正統)、『田奈の郷土誌』(正統)、『中里郷土史』がある。

〈青木〉